教育 みかわ

第136号

会長挨拶
学校自慢（幸田支部）
支部トピックス（西尾支部）
教室の窓から（蒲郡支部）
研究校紹介（田原支部）
定期総会　報告
定期総会　教育講演会
本部事業
三河教育研究会役員
教育随想

三河教育研究会　令和４年７月11日

会長挨拶

地域と世代を超えて学び合う場に

三河教育研究会　会長　松　平　貴　圭

青葉若葉を渡る風に、夏の気配を感じる五月十八日、蒲郡市民会館において、ご来賓の皆様のご臨席のもと、令和四年度三河教育研究会定期総会・教育講演会を開催することができました。令和元年度の開催以降、ここ二年間は開催が叶いませんでした。規模を縮小しての開催となりましたが、会員の皆様に心から厚くお礼申し上げます。

さて、三河教育研究会は、昭和三十六年、「三河の風土に根ざし、子どもを中心に据えた教育を実践する」という理念の下、発足して、昨年が六十周年でした。三河小中学校長会、愛知教育文化振興会との連携のもと、先輩方のたゆまぬ努力によって、確かな実績と伝統が築かれ、全国的にも珍しい大きな組織、長い歴史のある組織になっています。コロナ禍前まで、当たり前だと思っていた日常が、当たり前ではなかったこと、ありがたいことだったと気づかされました。三河各地では、授業研究での座席表や抽出児、教師の出、授業発言記録といったことが、これまで当たり前のこととして取り組まれています。他の地区には例を見ません。これも、三河すべての教員が三教研に所属し、研鑽を積んできたからこそです。これらが、単なる習慣、形骸化してしまわないよう、脈々と引き継がれてきた歴史の重さと、「はじめに子どもありき」の教育理念を大切にしながら、今の時代に合った、会員の先生方のニーズに合わせて、これからの三河の教育を考えていければと思います。若い先生方が増え、「継往開来」の言葉のように、先を見据えて新たな一歩を踏み出していくためにも、会の意義と取組を改めて確認していきたいものです。

新型コロナウイルスの出現に、学校現場では、感染拡大防止を最優先に考え、様々な制約がある中で、工夫し、試行錯誤しながら、教育活動を進めてきました。加えて、「生きる力」を育む、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すという、本来の役割を忘れず、教育活動を進めているところです。教育公務員特例法、あるいは教育基本法の改正では、教員は、「絶えず研究と修養に努めなければならない」とあります。研修は、私たちの責務です。研修をしなければならないので研修をしましょうなのですが、三河教育研究会は、三河全小中学校の約一万二千余の先生方が、自ら進んで研修を積む組織です。「三河のすべての子どもたちに、三河の教師による優れた教育を保証する」という、先輩方の熱き思いを次の代へとつなげる中で、さらなる充実・発展を図っていければと思います。

部会・委員会の研修会や研究集録、授業力養成講座、文化振興会の刊行物編集といったことが三教研の柱となっています。各支部では地域の特色、各校での取組を大切にして、市町村の現職研修との連携を取りつつ、併せて支部同士の横のつながりを積極的に活用していくこと。部会・委員会では、研修会や研究集録をもとに、成果を共有し、授業力・指導力のさらなる向上を図ること。このようなことを本年度も大切にしていきたいと考えています。

また、「授業力養成講座」は、その分野に優れた助言者から学ぶことができ、子どもたちにとって、実体験から学ぶということが欠かせないように、教師が他の市町村の授業を直に見て、学ぶことができる貴重な機会になっています。教師支援のよさ、授業展開のよさ、子どもの活動のよさ等は、その場で自分で感じ取ることが大切で、教師にとっての学びどころです。ぜひ、有効に活用していただければと思います。

刊行物の編集につきましては、編集そのものを教員研修の機会ととらえて、取り組んできました。授業を行う教員の声を取り入れて修正を重ね、子どもたちの実態に合った教材としていけるよう、会員全員で確認したいところです。

学校では、その行事の目的、働き方改革の中での時間のかけ方といったところで、様々な見直しを図りつつ、教育活動を進めています。三教研の諸活動についても、もう一度「目的とバランス」を振り返り、何のために、どこまでやるのかということを考える一年にしていけたらと思います。地域と世代を超えて切磋琢磨できる、会員相互が学び合う場となるように取り組んでいきましょう。

学校自慢

豊かな自然と温かな地域に囲まれて育つ「ふこうずっ子」

幸田町立深溝小学校

本校は幸田町の南部に位置し、学校の周りは緑豊かな山々に囲まれています。また、校舎から南方に目を移すと、南西に三ヶ根山山麓、南東に三河湾を望むことができます。豊かな自然の中で、温かな地域の方々に支えられ、「ふこうずっ子」は毎日元気いっぱいに、のびのびと学校生活を送っています。

本校はめざす学校を「楽しくて、力のつく学校」とし、自ら学びに向かい、互いに高め合う子どもの育成を目標に全職員が一枚岩となって指導にあたっています。特に、授業や行事などで自ら考え、判断し、決定し、行動しようとする力をつけるために、自己決定の機会を大切にしています。授業では教師から与えられるのではなく、子どもたちの「やってみたい」という思いを大切にして、様々な学習に取り組んでいます。こうした子どもの思考を大切にした授業の積み重ねが、主体的に学ぼうとする「ふこうずっ子」の姿につながると考えています。

そんな「ふこうずっ子」たちにとって、絶好の遊び場が校内にあるビオトープです。ビオトープには水車小屋があり、水のせせらぎの音とともに、心地よいリズムで回る水車の音が、子どもにも職員にも安らぎを与えてくれます。また、ビオトープ内には様々な生き物や植物が生息しています。休み時間になると、たくさんの子どもたちがビオトープを訪れます。「四つ葉のクローバーを見つけたよ」「この虫は何ていう虫だろう」と、子どもたちは目を輝かせながら、ビオトープ内を散策しています。ビオトープは、子どもたちにとってお気に入りの場所となっています。

豊かな自然、温かな地域の方々、そして何よりも素朴で、素直な子どもたちが学区の宝物です。（文責・鈴木　圭太）

ビオトープに向かって駆け出す子どもたち

支部トピックス

コロナに負けない ～伝統を守り、伝統を生み出す～

西尾市立室場小学校

西尾市内の北東部に位置する室場小学校区は、緑あふれる自然に恵まれた地域です。校区内には、西尾市いきものふれあいの里や平原ゲンジボタルの里などがあり、本校の子供たちは自然に触れ合う機会が多くあります。

平原ゲンジボタルの里では、毎年六月上旬に、保存会の方によるホタル祭りが開催されます。そこでは、本校の「ホタルクラブ」の子供が大切に人工飼育した「ゲンジボタル」が飛び交います。

そして、このホタル祭り当日には、六年生がホタルガイドを行うことが、本校の伝統となっています。

ホタルガイドは、六年生が二十三年間続けた取組です。ホタル祭り中の三日間、自分たちが調べたホタルに関する様々なことを、現地を訪れたお客さんに発表します。ホタルの一生、ホタルの種類、ホタル観賞をする上での注意事項など、子供たち自身がテーマを決めて、グループで調べたことを発表します。

しかし、一昨年度、そして昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、ホタル祭りが中止となってしまいました。六年生の子供たちは、伝統のホタルガイドができず、大変悔しい思いをしました。

しかし、昨年度の六年生は、そこで終わりませんでした。伝統を絶やしてはいけないと、校内で、下級生を対象にしたホタルツアーを計画しました。それは、六年生が校内に分かれ、回ってきた下級生が、ホタルガイドで行うはずだった説明を聞くというものでした。ただ回るだけではなく、スタンプラリー形式にして、低学年も楽しめる工夫もされました。

また、計画を進める中で、学校のマスコットを作りたいと考え、「ホタるん」が誕生しました。

人との関わりが制限される厳しい状況の中でも、室場小の伝統を守るために、子供たち自身が考え、生み出し、行動したすばらしい取組となりました。

これからも、子供たちと共に、ホタルを中心とした室場小の伝統を守り続けていきます。

（文責・稲吉　直樹）

ホタルツアーで下級生に発表する６年生

教室の窓から

地域を知り、地域を愛する子どもたちに

蒲郡市立大塚小学校

教室より校外を眺めると、南に三河湾、その奥に渥美半島を、北には、さがらの森を懐に御堂山を望むことができます。御堂山は、天然記念物の「ヒメハルゼミ」の生息地としても知られています。

「大塚」という地名の通り、学区内にはたくさんの古墳があります。三月田古墳は、地域の方が、きれいに管理しています。校内のあちらこちらに「大門遺跡」や「大正」「紀元」などの文字が刻まれた碑があります。

こうした豊かな自然と歴史ある地域に恵まれ、大塚の子どもたちはのびのびと学校生活を送っています。

昨年度の四年生は、伝統工芸でもある三河木綿作りや海岸清掃を行いました。

五月に木綿の種まきをし、十月に実った木綿を収穫して木綿から糸を紡ぎ、コースター作りにチャレンジしました。ふわふわの白い綿がはじけるように顔を出したときの驚き、糸を切らずに紡ぐときの緊張感、機織り機で布地ができあがっていく喜びは、実際に体験したからこそ味わえる喜びでした。

また、十一月には保護者にも協力してもらい、海岸清掃を行いました。たくさんのごみを拾って学校に戻るときには、行きには気づかなかった道ばたのごみに目がいくようになりました。そして、海岸で拾った小さなプラスチックごみをさらに細かく裁断し、万華鏡の中に入れると息をのむほど美しい世界が現れました。砂浜ではごみだったものが、万華鏡の中で宝石のように輝いていることにびっくりした子どもたちにとって、環境に対する意識をがらりと変えた一日になりました。

（文責・田中　宏幸）

◀海岸の清掃活動

三河木綿作り▶

校研紹介

「自ら未来を切り拓く子」～ＳＤＧｓを意識した取り組みを通して～

田原市立童浦小学校

本校は、田原市の北東部に位置し、周りを臨海工業地帯と三河湾、汐川干潟などに囲まれています。在籍児童数は四百十七名で、市内では最も多いです。

田原市教育委員会より令和三・四年度の課題研究の委嘱を受け、生活科・総合的な学習の時間を中心とした探究的な学習の研究を進めています。

一　主題設定の背景とめざす子ども像

目まぐるしく変化する社会でたくましく生き抜く力を身につけることが、子どもたちに求められています。そこで、「自ら課題を見つけ、その解決に向けて主体的に取り組む態度を養う」ことに、じっくりと取り組みたいと考えました。そして世界では、ＳＤＧｓの達成をめざしていることを受け、本校においても、めざす子ども像を「自ら未来を切り拓く子」と設定し、「目標をもち、ＳＤＧｓの視点に立った課題を見つけ、自分事として探究し、行動すること」を構想の中心に据えています。

二　研究の概要

めざす子ども像に迫るために、次のような手立てを考え、研究に取り組んでいます。

①　ＳＤＧｓ達成の鍵となるＥＳＤの視点で、子どもにつけさせたい力を明確にした教育活動を展開します。

②　子どもが見通しをもって追究しやすいように、「つかむ」「考える」「行動する（発信する）」「振り返る」の四つの段階で単元を構想します。

③　身近な自然、地域・社会、人々の良さを実感できるような体験活動を重視することで、そこから見えてきた課題を自分事として捉えることができるようにします。

④　自分事となる課題の設定や具体的に何ができるのかという解決に向けて、教科横断的な学習を行うとともに、子どもの考えを比較、分類、整理する思考ツールを活用します。

十月二十七日（木）に授業公開と講演会を行います。多くの方にご参観いただきご指導いただければ幸いです。

（文責・鈴木　弘美）

思考ツールを使って
考える子ども

令和四年度　定期総会　報告

五月十八日（水）蒲郡市民会館

五月十八日（水）、令和四年度三河教育研究会定期総会・教育講演会を、約六百名の会員とご来賓の皆様のご臨席を得て、三年ぶりに開催しました。

定期総会では、まず本年度の役員が承認され、松平貴圭会長を中心とした新体制が発足しました。

松平会長は挨拶の中で、三河の教育では、「座席表」「カルテ」「抽出児」「教師の出」「授業発言記録」といった営みが、当たり前のこととして取り組まれていると語り、これは、三河のすべての教員が三教研に属し、研鑽を進めてきたからこそであると、本会の意義とその成果について力強く述べられました。

新型コロナ禍の中でも、感染対策を最優先に考え、「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす本来の役割を忘れず、教育活動を進めるべきであること。また、三河教育研究会発足当時の「三河のすべての子どもたちに、三河の教師による優れた教育を保証する」という先輩方の熱き想いを次の代へつなげる中で、三教研の諸活動のさらなる充実・発展を図っていこうと会員に語りかけました。

就任の挨拶に続き、来賓を代表し、愛知県教育委員会委員の岡田豊様、蒲郡市副市長の大原義文様からご祝辞をいただきました。

岡田様からは、生活様式が変化する中で、子どもたちがこれからの未来をたくましく生きるために、新たな価値観を創造する力の育成が求められていること。ＩＣＴ機器は、子どもたち個々の興味関心に応じた異なる目標に向け、理解を深め、自らの学びを選択できる有効な手段となり得ると、ＩＣＴ教育を推進すること。これらの大切さについてご示唆いただきました。

大原様からは、地元を離れても故郷を大切にする子どもたち、困難な時代でも自らの力で生きていく子どもたちを育んでいくことが、日本の未来をつくっていくことにつながり、その中核を担っているのが教員であり、三河教育研究会であるとのお言葉をいただきました。

ご祝辞ののち、前年度の活動にご尽力いただきました前会長の岡田守先生、前副会長の伊豫田守先生、加藤応子先生に感謝状を贈呈しました。

それに続き、令和三年度の事業報告・決算報告、令和四年度の事業計画案・予算案について、すべての議案が賛成多数で承認されました。

三年ぶりの総会となりましたが、多くの皆様のご協力により、盛会裏に終えることができました。

教育講演会

演題　「東京２０２０大会の開催意義とその検証」
～大会招致・決定から、延期、開催を振り返って～

講師　公益財団法人日本オリンピック委員会　強化部
専任部長（ナショナルトレーニングセンター統括）
中森 康弘 氏

本年度の教育講演会は、公益財団法人日本オリンピック委員会強化部専任部長である中森康弘様をお招きし、東京オリンピックの招致活動における戦略と東京オリンピックの成果について、具体的な場面をもとにお話しいただきました。中森様の講演の中心的な部分を切り取って紹介します。

私がオリンピック招致をした目的は、世界最大のスポーツの祭典で、世界一を競うトップアスリートの姿を、子どもたち自身の目で見てほしかったという思いです。そのモチベーションで十年間・二回のオリンピック招致にかかわらせていただきました。

オリンピック招致は、手を挙げてから投票までを二年間で完結しなければなりません。その二年間で、しっかりとした組織マネジメント、必要な資金や明確な計画づくりを行い、効果的に全世界に対するプロモーションを行います。そして、投票権を持つＩＯＣ委員個々への働きかけを行うという流れの中で、必要不可欠とされるのが、国民の理解を得て将来を見据えた良い計画をつくることです。そこで、招致活動をマネジメントする際に基本としたのが、ピーター・ドラッカーの「五つの質問」です。使命は何か。我々の顧客は誰で、どのような商品を売り込んでいくか。国民のため、そして、それが将来のスポーツ界にとっての価値はどのようなものであるか。成果はどういうものが期待できるか。そして、具体的な計画は何か。まさしくこのドラッカーの五つの質問がぴったりと当てはまりました。特に自らをマネジメントすることは、学校において言うならば、児童・生徒さ

んが、まずは、目標とビジョンをもって、人生設計をしっかり立てることが必要であり、常に成長と自己変革をしていく、そういったことを自主的に取り組んでいくことになるのではないでしょうか。

オリンピックの開催都市は、ＩＯＣ委員の多数決投票で決まります。ですから、ＩＯＣ委員に投票してもらうために必要なのは、知識、オリンピックに対するビジョンやアスリートに対する思いなどを伝えて信頼感を得ると共に、いかに説得できるかという「コミュニケーション能力」です。これは、児童・生徒の皆さんを指導する中でも、大切なのではないかと思います。

勝てる招致、勝てる勝負というのは、自分の弱点を払拭し、そして、変化を読んで最後に風を掴むことです。いろいろな勝負の世界で重要なのは、「如何に風を掴むか」とよく言われると思います。やっぱりこういった流れや状況を正確に把握して、自分に有利になるような戦略を立て実行することが重要であると、招致活動を通して実感いたしました。

私は、東京２０２０大会が決まった直後に理想を掲げました。二十年前には、18％近くあった日本のＧＤＰが、今は約６％しかなく、経済力も衰えている中で、東京オリンピックをきっかけに、国際ブランド力、経済力をもう一度高めたいという気持ちがありました。あとは、施設としてハードとして残るもの、無形の財産として人々の心に残るものなど、有形無形のレガシーを構築することで、オリンピックの価値を高める機会とすることだったのです。

選手の純粋な活躍が、国民の心にしみ渡って、その感動が、生涯にわたってそれぞれの個人の中で残り、それが次の世代を担う子どもたちに引き継がれて、新たなアスリートが誕生し、さらに感動を与えられる。このような好循環が生まれるよう選手の強化活動事業を、ナショナルトレーニングセンターで行わせていただいています。

二〇二六年の愛知・名古屋で行われるアジア競技大会については、ぜひ私もサポートさせていただきます。この大会が県民や市町村の人たちにも、そして、児童・生徒さん一人一人の心の中にも残るように、さらには大会だけでなく、いろいろな国際的な交流をする機会を創出し、多様なモチベーションを子どもたちに与えるきっかけになると思います。ぜひアジア大会を契機にして、日本の将来を担う児童・生徒さんの成長の糧にしていただきたいです。そんなアジア大会になるように、私も尽力していきますので、皆様にもご理解とご協力をお願いし、私のお話とさせていただきます。

令和四年度　本部事業
生きる力を育成する三河教育
～学び合い、学び続ける教員として～

総務委員会

三河教育研究会（以下三教研と表記）は、本年度、創立六十一年目を迎えました。子どもを中心に据えた教育活動を根幹におき、生きて働く資質・能力を育むことができる教育活動を追究し、多くの成果をあげてきました。

国は、今後の教育課程の在り方について、「多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する『個別最適な学び』と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす『協働的な学び』の一体的な充実が図られることが求められる」としています。私たちには、これまで三教研が進めてきた「子どもありき」の授業づくりを継承・深化させ、その成果をより広く発信していくことが求められています。

本年度も、三教研の各部会・委員会の研修会・研究会において、魅力と実効性のある研修活動を計画しました。教育研究におけるミドルリーダー養成を目的とした授業力養成講座を引き続き開催します。会員の皆様には、主体的にご参加いただき、学びを各地域や学校に還元していただけるようお願いします。

なお、三教研の取組や、各学校で実践された学習指導案などをホームページや広報「教育　みかわ」で紹介し、学びを共有していきます。会員の皆様からの情報提供をお待ちしています。

アドレス：https://www.sankyouken.jp/

国語部会夏季研修会	8／5	安城
国語部会書写実技講習会	7／22	岡崎
愛知県書写書道教育研究協議会	11／30	未定
社会部会夏季研修会	8／4	蒲郡
愛知県数学教育研究会 小中学校部研究大会	8／25	蒲郡
理科部会夏季研修会	8／5	刈谷
生活科部会夏季研修会	8／4	岡崎
音楽部会夏季研修会	8／2	岡崎
愛知県小中学校音楽教育研究大会	11／14	尾張旭
愛知県造形教育研究会 総会及び協議会	11／11	岡崎
保健体育部会夏季研修会	8／5	豊橋
愛知県家庭科教育研究会安城大会	11／11	安城
東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会 愛知県中学校技術・家庭科研究大会	10／20・21	名古屋・豊橋
英語（外国語活動）部会夏季研修会	8／5	豊田
道徳部会夏季研修会	8／5	豊田
特別活動部会夏季研修会	8／2	豊田
特別支援教育部会夏季研修会	8／5	みよし
愛知県養護教育研究大会	7／26	刈谷（WEB開催）
総合的な学習部会夏季研修会	8／2	安城
ＩＣＴ活用研究会	8／5	田原
愛知県学校図書館研究大会	8／24	名古屋（オンライン配信）
愛知県統計教育研究発表会・講演会	11／15	名古屋
愛知県生徒指導研究大会	11／9	豊橋
愛知県へき地・複式・小規模 学校教育研究大会	10／21	豊田
授業力養成講座Ⅰ（西三河）	8／24	岡崎
授業力養成講座Ⅰ（東三河）	8／23	田原
授業力養成講座Ⅱ（西三河）	10／20	岡崎
授業力養成講座Ⅱ（西三河）	10／27	幸田
授業力養成講座Ⅱ（東三河）	10／26	田原

令和四年度
三河教育研究会役員

会長　豊川南部中　松平貴圭
副会長　岡崎城北中　中野渡善樹
　　安城桜井小　鈴木佳樹
　　北設東栄小　後藤理恵
顧問　岡崎葵中　柴田昌一
会計監査　豊田挙母小　保科克之
　　西尾東部中　石川雅春
幹事　豊橋汐田小　中神和也
　　西尾幡豆小　中村賢司
　　豊橋南部中　原田憲一
　　豊川牛久保小　小澤慎一
庶務　愛教大附属岡崎小　大槻真哉
　　愛教大附属岡崎中　手島英樹
　　愛教大附属特別支援　鈴木則明
　　愛教大附属岡崎小　廣川幸平
　　愛教大附属岡崎中　山田晃広
　　愛教大附属特別支援　富安洋介
会計　安城二本木小　都築智
　　北設東栄中　夏目貴司
　　愛教大附属岡崎小　大久保輝聡

◆評議員
（部会長）

国語　高浜南中　清水美智男
社会　豊橋松葉小　松河由美子
算数数学　岡崎岡崎小　鈴木勝久
理科　知立知立南小　福井信也
生活科　豊橋豊小　稲田あけみ
音楽　岡崎六ツ美西部小　寺島真澄
造形　西尾米津小　丹羽圭介
保健体育　豊橋高師台中　石川立恵
技術・家庭　岡崎梅園小　近藤文彦
英語（外国語活動）　岡崎常磐中　石川敏幸
道徳　安城安城南部小　杉浦和明
特別活動　豊橋牟呂中　吉見央
特別支援教育　みよし三吉小　佐久間章貴
養護教諭　刈谷双葉小　土井淳
総合的な学習　安城志貴小　宮田美智子

（各種研究委員会）

学習情報　岡崎福岡中　森竜師
学校図書館　西尾一色南部小　今本政勝
統計教育　安城三河安城小　濱田孝之
生徒指導　豊橋東部中　梅原康史
へき地教育　豊田小原中　後藤誠二

（支部長）

豊橋　嵩山小　高梨諭司
豊川　赤坂小　中河伸弥
蒲郡　三谷東小　松下達
新城　鳳来寺小　原田耕三
田原　衣笠小　立花英夫
北設　東栄小　後藤理恵
岡崎　竜美丘小　吉田章二
碧南　新川小　鈴木裕
刈谷　衣浦小　竹口史恭
豊田　下山中　津坂明宏
安城　安城中部小　水上敏則
西尾　福地北部小　牧野伸
知立　知立西小　井上美智子
高浜　南中　清水美智男
みよし　南中　宮田安弘
幸田　幸田小　唐澤満

◆常任委員

総務委員会
委員長　安城桜井小　鈴木佳樹
副委員長　愛教大附属岡崎小　大槻真哉
委員　安城安城北部小　加藤雅亮
　　西尾東幡豆小　江坂由紀
　　豊川御津中　岡田裕之
　　愛教大附属岡崎小　廣川幸平
　　愛教大附属岡崎小　大久保輝聡

広報委員会
委員長　岡崎葵中　柴田昌一
副委員長　愛教大附属特別支援　鈴木則明
委員　蒲郡塩津小　伊藤孝明
　　岡崎梅園小　清水孝治
　　幸田深溝小　吉本順子
　　愛教大附属特別支援　富安洋介
　　愛教大附属特別支援　川合陽介

調査委員会
委員長　岡崎城北中　中野渡善樹
副委員長　北設東栄小　後藤理恵
　　愛教大附属岡崎中　手島英樹
委員　豊田若園中　神戸勝一
　　豊橋玉川小　藤原幸代
　　刈谷富士松北小　鵜飼篤史
　　愛教大附属岡崎中　山田晃広
　　愛教大附属岡崎中　村上智彦

教育随想（92）

『部活動の改革に寄せて』

碧南市教育委員会
教育長
生　田　弘　幸

いよいよ令和五年から部活動の改革が実施されます。「部活動を学校から地域の取り組みとする」ことを骨子とした、学校の働き方改革を踏まえた変革です。

そもそも、体育教師として部活動指導を大切にしてきた私の教員人生からすると、これは青天の霹靂とも言える大変革となります。若い頃バスケットボール部の顧問をしていた私は、大みそかから正月にかけて市内の温泉施設で合宿を行い、県外の強豪チームを迎えて、学校の体育館を独占して練習試合をしていました。また、サッカー部の顧問をしていたときには、あまりに対外試合を組んで交通費を使い果たしたため、その後の試合はすべて自転車で参加せざるを得ず、なんと豊田までみんなで走った記憶があります。

今思えば、随分と非常識で、責任を問われるような活動状況であったかと冷や汗をかきます。しかし、生徒と一緒になって燃え、何とかして生徒を強くしてやりたい、負けてなるものかと懸命になって指導に励んでいました。生徒たちはそんな私の指導に従い、多大な練習量と理不尽に耐え、めきめきと実力をつけて成果をあげていました。当時は、そんな活動が普通であったように思います。

でも、このような部活動が半世紀もの間続けてこられたのはなぜでしょうか。教員として志の高い人が、子のため世のためと自らを犠牲にして尽くしてきたことに間違いはありませんが、そんな善意だけで半世紀もの間続くとは考えにくいように思います。そこで、その要因を私なりに考えてみますと、当時の教員は給与の延長線上に部活動があることを、良しとしていたのではないかと思うのです。当時は、高度経済成長後に教員の給与がかなり増えた時代でした。ですから、これだけの給与をもらっているのだから、部活動の指導もその給与のうちと、半ば納得していたのではないかと思うのです。

そう考えると、改革の目玉である部活動の地域移行については、問題が生じます。地域移行では、一般の方に部活動の指導をお願いすることになりますが、報酬は限られた額であり、指導者の熱意や善意に頼らざるを得ないことになるからです。一般の方に、休日返上で、ほぼボランティアのように部活動をお願いすることは容易なことではなく、ここに地域移行の困難があるのです。

しかし、近年の働き方改革やコロナ禍の対応策などで、学校を取り巻く社会は大きく様変わりし、令和五年から始まる部活動改革は喫緊の課題となっています。私たちは、このような社会状況やニーズに合わせて、新しい見地で課題に立ち向かわなければなりません。そんなとき、私の頭に浮かぶのは、あの「不易と流行」という言葉です。これは、松尾芭蕉が「おくのほそ道」の旅をする中で体得した観念だと言われています。皆さんもご存じの通り、「不易」は、いくら世の中が変わっても変わらないもの、変えてはいけないもの、「流行」とは世の中の変化とともに変わっていくもの、変えなければならないものという意味です。

今回の部活動の改革を行うにあたり、不易は子どもの未来を見据えて何が幸せかを一番に考えることであると思っています。そして、部活が大好きな者にとっては寂しさを伴うかと思いますが、変えるべきは変えるという流行の見地に立ち、様々な困難を克服しながら時代に合わせた新しい活動づくりに取り組んでいかなければならないと考えています。

編集後記

三年ぶりに三河教育研究会定期総会・教育講演会が開催されました。コロナ禍ではありますが、三河教育研究会としての歩みを改めて肌で感じることができた一日となりました。

本年度の三教研の各部会・委員会の研修会・研究会、並びに授業力養成講座が、三河のすべての子どもたちの健やかな成長や三河のすべての教師の力量向上を目標として、さらなる充実や創意工夫がみられることを期待してやみません。

そして、今年こそマスクをはずした子どもたちの笑顔が、教育活動の場で溢れるようになることを切に願っています。

ご多用の中、原稿をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。

表紙の写真
「一輪車　8の字回転」
撮影　岡崎市立下山小学校
今泉美貴子 先生

カット
豊橋市立多米小学校
田中　千晶 先生